

はじめてのお願い

福岡 路子

まわりとの境目がはっきりしなくて、もやもや、ふわふわしていた私が、ちゃんと「私」(★ゆい)になれたのは、さやちゃんのおかげだと思う。

昔、ママにカラフルな金平糖の小瓶をもらった。きれいだったから、食べずにしばらくの間、机の上で飾っていた。その中に、白っぽい曇りガラスみたいな色の金平糖があって、カラフルな色に混じるその他大勢みたいな色が、つまらなくて、早く無くなるようにそれから食べた。でも色のない金平糖でも、ちゃんとはじまりの核があって、それが星の形になるんだよね。

従妹のさやちゃんと会ったのは、私が小学四年生の頃、さやちゃんは、一つ上の五年生だった。夏休みに入る前日に、さやちゃんはさやちゃんのお母さんと、おじいちゃんが裏の畑をつぶして建てたハイツに引っ越して来た。

私のママとパパは、私が生まれる前から、お店をしていて、休みは月曜日しかなかったから、私は歩いて十分ぐらいのところにあるおじいちゃんの家ほとんど預けられていた。さやちゃんともそこで出会った。

四年生の夏休みに入る最後の日、私は一人でおじいちゃんの家までの道を帰っていた。三年生の頃は、クラスの友達と、近所まで帰っていたけど、今のクラスになって、一人で帰ることの方が多くなった。みんな、習い事で忙しいっていうのもあるけど、たぶんそれだけじゃない。

放課後、教室で、誰かが「加奈ちゃんの家で集合ね！」って、話をしていても、私は、何にも聞こえなかった、みたいに俯いて教室を出る。

新しいクラスが始まってすぐ、近くの席の子と話していると、クスクスと笑われるようになった。中心には、いつも佐々木さんがいた。髪をポニーテールにしている、授業中に自分から手を挙げて発表する積極的な女の子。耳の後ろに手をピタッとつけて、すぐくまっすく手を挙げるから、ちよつと前に流行ったお笑いコンビの背の低いほうに似ているね、って隣の席の吉田さんに小声で言ったのがバレちゃったのかもしれない。

最初、私は自分が笑われているなんて気付いてなくて、でも私がそっちの方をみると笑い声が止むから、そのうちそうなのかなって思うようになった。自分ではどこが違うかよく分からないけど、私のイントネーションは皆とちよつと違うらしい。お母さんが鹿児島出身だからかもしれない。でも直そうと思ってもどうしたらいいのか分からなくて、自分からクラスの子に話しかけるのが苦手になってしまった。

それとも私の持つてくるお弁当のせいかな？ 学校ではお弁当の日というのがあって、その日は家からお弁当を持つてくる。私のお弁当は祖母が作った筑前煮とか煮豆とかきんぴらごぼうとか茶色っぽいおかずが多かった。みんなが持つてくるカラフルなお弁当と違うと気付いてからは、お弁当を膝の上に置いて食べるようになった。

別にいじめられてたわけじゃない。本好きの高橋さんが中心の大人しい子が多いグループに入れてもらって、一緒に机をくっつけて給食を食べていたし、遠足のグループ決めも、仲間外れにされることだってなかった。

でも、最近は友達と遊ぶより、おじいちゃんの家でおじいちゃんとおばあちゃんと過ごすのが、一番ほつとした。おじいちゃんが見ている時代劇を、いっしょにこたつの部屋で見ながら、おばあちゃんに頼まれた料理の下ごしらえをしたりする。ぎょうぎの皮をのぼしたり、もやしの根をとったり、ジャガイモをつぶしたりするのは、集中していても、ぼうつと考えことをしていたつて出来る。

それから、おじいちゃんの家で飼っているバグのうめこと遊んだ。うめこのしつぽは何度のぼしても、手を離すとすぐにくるんと丸まってかわいい。私は飽きずに何回もしつぽをのぼして遊んだ。うめこは怒らずにいつも、それに付き合ってくれた。それから、いつも濡れている鼻を近付けて私の手の匂いをふんふんと嗅いでくれる。その頃の私の世界は、そんなもので作られていて、それで別にさみしいとは思わなかった。

ただいま、と言って入つたおじいちゃんの家はしんとしていた。玄関にいつもある二人の履き物がなくて、「あれ？」と思った。私が学校から帰る時間に、二人がいないことはほとんどなかったし、もしそういうことがあるば、前もつて教えてくれていたからだ。

なんとなくのどが渴いた気がして、冷蔵庫からオレンジジュースを出して二口飲んで、それから台所のパントリーに入つている袋入りの小さなドーナツを二つ取り出す。一つは口に入れもう一つはポケットに入れた。それから台所から続きになっている和室に、ランドセルを降ろし、炬燵の上に学校から持ち帰つてきたものを並べた。終業式の日はいつもと違うものがたくさんある。

教室の後ろに貼つてあつた遠足のときに描いた動物園の絵、給食のときに食べきれずに机の奥にしまつていたかちかちになったパン、先生の手描きの似顔絵が印刷されてる一学

期最後の学級日より、それから通知表。

通知表を手にとって眺めた。教室ではきっと見たただけだったけれど、何度見ても、5は一つもなくて、4は理科の一つだけで、あとは全部3だった。音楽の授業では、一、二回はつまつたけれど、最後までリコーダーを吹けたし、漢字の書き取りテストもそんなに悪い点数じゃなかったから、もう少しいい成績だと思っていた。

通知表の一番下に先生のコメント欄があつて、

「自己学習ノートがいつも丁寧ですね。テントウムシの写生は足の節まできちんと描けていました。授業中にもう少し積極的に発言しましょう」と書かれていた。

新しい学年が始まって、初めての家庭訪問のときに、お母さんが担任のあすか先生に、「手がかからないけど何を考えているか分からないんです。何がしたいとか欲しいとか全然言わなくて。女の子ってこんなものなんでしょうか」と笑いながら、でもちよつと困つたように話すのを横で聞いていた。その後、二人がどんな話をしていたか、私はうまく思い出せない。窓の外の雲がすごい勢いで流れていて、私はそれをずっと見ていた。

この前、スーパーのお菓子売り場で、駄々をこねている低学年ぐらいの男の子をみた。お菓子コーナーの前に座り込んで泣いている。私はそれをちらっと見て通り過ぎた。男の子はお母さんに叱られて、お父さんに無理やり抱えあげられても、自分の欲しいものを身体全部使つて訴えている。そんなにまでして、欲しいもの、私には思いつかない。

どちらかというとき黄色より青が好きだし、りんごよりいちごが好きだけど、でもどうしてもつてわけじゃない。欲しそうにしている子がいれば、譲つてあげられる。その子からありがたうって言われたらうれしい。そうやって優しくできる自分はえらいって思つた。

通知表を見せるのは、動物園の絵を見てもらつてからにしよう。キリンの模様は、結構うまく描けたはず。そう決めて、広げた持ち物の一番下に通知表を置きなおしたとき、どこかでドアが閉まるボタンという音が聞こえた。同時にうめこが廊下の奥からすごい勢いで走つて来た。私は抱き上げて、どうしたの、と聞く。うめこは、いつもと同じように、私の鼻をぺろぺろと舐めた。そのとき、また今度は明らかにバンと何か重いものが床にぶつかる音が二階から聞こえてきた。おじいちゃんかな？ おばあちゃんは去年、階段を降りそこなつて転んでから、ほとんど二階には上がらなくなっていた。靴がなかったような気がしたけれど、おじいちゃんが本の整理でもしているのかもしれない。

うめこを肩に引っ掛けるように抱っこして、ポケットからドーナツを出して口に入れて階段に向かった。最初の段に足をかけたとき、うめこが急に腕の中でもがき出し、私の腕をすり抜けて、二階に向かって走り出した。私は食べきれなかったドーナツのかけらを口から

出して、片手に持って追いかけた。

今は物置になっている、元々はママの部屋だった六畳の洋室をのぞくと、そこに私と同じぐらいの年の女の子が尻もちをついていた。周りにはマンガが散らばっている。ママが集めていた「ときめきトウナイト」の二巻が、ページが開いたまま表紙を上にして床に置かれていた。女の子の足元にうめこがまとわりついている。

知らない女の子が家にいる！ 私は動けなくなった。

その子は、靴下をなめているうめこを顔の前に持ち上げて、「うわあぶさいく！ しわくちゃ！」と大きな声で言った。それから、ぐりぐりと頭をパグの首筋のしわに押し付けて、変なおいがする、と嬉しそうに笑った。女の子は、前髪を眉の上で切り揃えたおかつぱ頭で、目も口も耳も、顔のパーツそれぞれ大きくて、笑うと光が溢れるみたいに、その場がぱつと明るくなった。

そこで、ママが前に、夏休みに唯の従妹が引越してくるんだよ、と言っていたことを思い出した。

今日だったんだ！ でも、どうして一人にいるんだろう？

ママは夜、私が夕食もお風呂も宿題も済ませて、バジヤマになってうとうとしかけているときにおじいちゃんの家を迎えに来て家に連れ帰ってくれる。私の部屋で、眠たくなったママと眠たくなかった私は、ベッドの中でいつも少しだけおしゃべりする。

「さやちゃんって言って、私の妹の子供なの。ちょっと前まで、北海道にいたけど、夏休みだけこっちで過ごすんだって」

そう言って、従妹と叔母さんが、絨毯みたいな紫色のお花畑の前で写っている写真を見せてくれた。

「唯と仲良くなってくれるといいなあ」

ママは楽しみね、と言って、それから写真をまじまじと見ながら、

「赤ちゃんの頃しか知らなかったけど、将来美人になるか愛嬌のあるユニークな顔になるか、絶妙な顔立ちしてるわ」と言った。その時はどういう意味かわからなかったけど、「本物」を見るとなんとなくわかる気がした。

「さやちゃん？」私がおそるおそる呼びかけた声は、女の子の耳に届かなかったみたいで、彼女は、しばらくうめこをぎゅぎゅうと抱きしめて、あちこちの匂いを嗅いでいた。やっと私の方を振り返ってうめこを解放したときは、うめこは、はあはあと胸を大きく喘がせていた。女の子は、

「名前、なんてゆうの」と、私に向かって聞いた。

その声は、想像通りのよく通る声で、でも声変わりをし始めた男の子みたいにちょっとだ

けかすれているようにも思った。視線は、ずっとパグの方だったから、

「うめこだよ。おじいちゃんが、好きだから、梅の花」と犬の名前を教えた。それから、

「あ、あのね、梅の木ね、裏のハイツにあるよ、春になるときれいに咲くよ。ね、あなたは、」でも、その子は、私の言葉なんか聞いていなくて、うめこーと言いながら、うめこの腹をなでている。渋すぎる名前、クールだぜと一人でブツブツ言っていて、私のことは見えていないみたいだ。

「あ、あの私の、」

と言いかけたところで、やっとこっちを見て、

「ゆいだよね？」と言われた。

ゆいって呼び捨てにされるのは家族以外で初めてで、どきっとしたけど、でもちっとも嫌な気持ちにならなかった。私が何も、答えられないうちに、公園でボール投げしようぜー！と言いながら女の子は階下に向かって走り出していった。うめこはそれを追いかけていく。私は、女の子の勢いについていけなくて、一人その場に取り残されてしまう。追いかけようととして、足がすくむ。クラスに馴染めない自分を思い出してしまう。

「仲良くなんて、なれないんだ」

この家の中でも、一人ぼっちになった気がして、ふいに涙が出そうになる。一緒に遊んで、って言えない自分が悲しかった。

握りしめていた左手を開くとぼろぼろになった食べかけのドーナツがあった。その時、空気が動く気配がして、俯いている私の顔のすぐ前にさやちゃんの顔が現れた。あまりにも近くて、目がぼやけてしまう。

「私、沙也加っていうの。ゆいは、ボール投げきらい？」

私はボール投げ得意！ と言って、さやちゃんは私の手の中にあるドーナツをつかんで、廊下の窓から外に、「シュート！」って言いながら、おもいつきり放り投げた。

それは、まっすぐに隣のハイツの敷地内に吸い込まれていった。

さやちゃんはそれから、右手で私の左手を引っ張りながら、「よし、やっぱりゲームにしよう。マリオカートかポケモン！」と言った。

「あと冷蔵庫にアイスがあるの見ちゃった。それ食べながらしようね」とさやちゃんが耳元でささやく。その目が、薄暗い廊下にあって、光を集めてきらきらと輝いていて、私はもうさやちゃんしか見えなくなった。

さやちゃん母子(★おやこ)は、夏休みの間だけ、お祖父ちゃんのハイツに住んで、そこに家財道具とかの大きな荷物を置いたまま、海外に引っ越すのだそうだ。ハイツに短期間だ

け住むことになったのはさやちゃんのお父さんの社宅の事情らしい。

さやちゃんのお父さんは、ペンギンの研究を北海道の大学でしていたけれど、今年から、南極にいるペンギンを調査することになって、タスマニアにある研究所に三年間派遣されることになった。タスマニアから南極までは船で一週間はかかる。お父さんは、もう何か月も前から行って、南極の生活に慣れるように訓練をしていて、さやちゃんたち母子は、秋からの学校に合わせて八月の半ばにお父さんの所に行くことになっている。というようなことをさやちゃんはマリオカートをしながら教えてくれた。

さやちゃんは、私が赤ちゃんのときに会ったことを覚えていると言った。ゆいは、ピンク色の服着てハイハイしてて、こざるみたいな顔をしていた、と言っていたけど、絶対適当に言っていると思う。

タスマニアって、どこって私は聞いて、さやちゃんは、さあ、よくわかんないけど地球の裏側って答えた。私はなんとなくぶくぶく泡立つマグマを想像した。

そうこうしているうちに、さやちゃんのお母さんとおじいちゃん、おばあちゃんが帰ってきた。さやちゃんはお母さんからこっぴどく叱られていた。お母さんが最寄り駅で皆へのお土産を買っている最中に、勝手にいなくなったからだ。

「えー、お母さん、お土産選ぶのに時間かかりすぎて、退屈なんだもん。でもいちおう先行くねって声かけたよ」とさやちゃんは不服そうだった。

おばあちゃんとおじいちゃんは、おばさんから電話を貰って、駅までの道を探していたそうだ。

「初めてなのに、よくここが分かったな」

とおじいちゃんのがのんきに言って、さやちゃんは、

「来る途中で、グーグルマップで見たもん。私地図が読めるの」

と得意げに言って、さらに怒られていた。

さやちゃんと私は親友になった。さやちゃんが引越してきた次の日、一日かけて、二人で夏休みをしたいことリストを作った。その最初の行に、さやとゆいは親友になる！ と大きな字でさやちゃん書いて、私は、それを当たり前みたいに眺めたけど、嬉しくて足がむずむずしてしまった。

私一人では、一つか二つしか思いつかないのに、さやちゃんといると、やりたいことがどんどん浮かんでくる。例えばこんな風だ。

「すいかを丸ごと食べる。一人一個！」

「ブレイブボードで、ウィリーをきめる」。

「海に行つて、かき氷と焼きそばを食べて、夜になったら打ち上げ花火をする」

「二人だけで映画を見に行つて、コーラを飲んでポップコーンを食べる」

「じいじの家に二人で泊まって徹夜で漫画を読む。先に寝た方が負け」

A4のノートを使って書いたリストは、結局書いただけで終わったのもあれば、実際にやり遂げたこともあった。

その中に、うめこがトイレを覚えるというのがあった。うめこは私が赤ちゃんの頃におじいちゃんが知り合いのブリーダーから貰ってきて、私の物心がつくころには、もうすでに成犬だった。でも、どれだけ教えてもトイレを覚えることが出来なくて、それが皆の悩みだった。ウンチはトイレで出来ていたから、何かの病気だろうと大人たちは話していた。うめこは、家の中で、ほとんどおむつを付けて過ごしていた。でも、不快なのか自分で外してしまつたり、おむつからおしっこが漏れてしまうことが時々あった。

おばあちゃんは、あんまり叱らなくて、しょうがないわねえと言いながら、汚したところをきれいにするだけだったけど、おじいちゃんは、よくうめこを叱った。うめこは犬なのに悲しい表情になって粗相をした場所をぐるぐると回つて、さやちゃんは悔しそうな顔で同じようにうろろうとうめこの周囲を回つた。

さやちゃんと私はまず、うめこ観察日記をつけた。うめこが一日どんな風にすごしているのかを全部書き出すのだ。さやちゃんは、研究者のお父さんに似て、何かを調べることが大好きだった。そのときにおしっこをする前後の様子も記録していた。そうしているうちにうめこが、おしっこをしたときは部屋のすみをぐるぐると回ることが分かった。

それに気づいたさやちゃんは、ゲームをしても宿題をしても、それを察知して、うめこをトイレに連れて行くようにした。上手にできたときは、恥ずかしくなるぐらい喜んでおやつをあげた。

「おおー！ うめこは天才だ！ 世界一！」

それからうめこの顔を嘗め回そうとするので、私は慌ててうめこを取り上げた。そして、うめこが失敗したときは、今度は、こらー！ と短く、実際に現場の前まで連れてきて叱つた。そんなことを続けているうちに、うめこはトイレでおしっこをするようになった。うめこは、さやちゃんが現れる前に比べて、誇らしげな顔になった気がした。

さやちゃんは物おじしなくて誰にでも話しかけるし、運動神経もいいから、公園や学校の校庭で遊んでいると、いろんな子が集まって来る。知らない子たちとボードに交代で乗ったり、いつの間にかサッカーをしたりしている。

走つて、どこか私の見えないところに行つてしまつて、心細い気持ちになったとき、さやちゃんはまるで察知したみたいに、私のところに戻つて来る。

「帰ろっか。お腹空いたー」「今日は肉じゃがだよ。ばあちゃん言った。デザートにスイカもあるよ」「スイカ!」

学校があったら、さやちゃんはきっと、みんなの人気者だろう。自慢したい気持ちと学校が休みで良かったという気持ちが半分ずつあった。

さやちゃんは私のヒーローだ。

でも、ヒーローには時間制限がある。ウルトラマンが地球に居られるのは三分だけだし、ドラえもんは、のび太を置いて自分の時代に帰ってしまうみたいに。さやちゃんその日も、決まっていた。

さやちゃんがタスマニアに出発する日は、隣町でお祭りがある日だった。飛行機は深夜便で、空港には二十時頃に行けばいいと聞いたから、私たちは、どうしてもどうしてもお願い! と、さやちゃんのお母さんに頼み込んで、お祭りに行かせて貰えることになった。

浴衣が着てみたいとさやちゃんが言ったから、私は慌てて、母におねだりして、紫陽花柄の紺色の浴衣を買ってもらった。さやちゃんは、大きな向日葵がプリントされた白に赤のストライプの浴衣を着て、黄色いリボンの髪留めをしていた。髪留めは、お揃いを付けたくて前の日に二人で100円ショップに行って買った。

さやちゃんのお母さんと五時に駅の改札前ねと指切りの約束をして、二人で駅から境内まで続く屋台を見て回った。夕方前の境内はたくさんの人でごった返していて、蒸し暑かった。

私はずっと俯いていた。お祭りに行く前に、さやちゃんと今日の計画をたくさん話したのに、全然力が出なかった。かき氷、飴屋さん、金魚すくい、くじびき、いろんな屋台を通り過ぎていく。さやちゃんも、何も言わずに私の隣を歩いていた。あれ、お祭りなんて非日常の場で、さやちゃんがどうして大人しく、私の横を歩いているんだろう? 私は立ち止まって、

「さやちゃん、眠い?」と聞いた。

「眠くない。ブルーすぎる。これから地球の裏側に行くの」

とずり下がっていた髪留めを雑に留めなおしながら、ふてくされたように横を向いた。

私はさやちゃんの前髪を手で横に流して髪留めで留めた。さやちゃんでも、不安になったりするんだというのがなんだか新鮮だった。

「タスマニアデビルとかウォンバットには会いたいけどさ。うめこにもゆいにも会えないし」

タスマニアデビルってなに、って聞くと、さやちゃんは、とたんに元気になって、教えてくれた。



「タスマニアデビルというのはだね、今は日本の動物園にもいるけど、元々はタスマニアにしかいなくて、絶滅危惧種なのだ。コアラとかカンガルーとかの仲間でお腹に袋があるんだよ。肉食で、顔も怖いけど、小さいのに歩き方がのしのしって感じで威張っているのが、逆にかわいい。ゆいも Youtube で見てー」

と言いながら、最後は、「ああ、でも、どう考えてもうめこのがかわいいよ」と弱弱しく言った。今日のさやちゃんは、どうしてもブルーになってしまみたいだ。

「じゃあ、神社でお願いしようよ！ さやちゃんがタスマニアでうまくいきますようにって。私もお願いしてあげる」

ゆい、なんて、かわいいやつ、さやちゃんは私にぎゅっとしがみついた。私は、痛いよーと笑って言いながら、でもそんなことを神様にお願ひしなくても、さやちゃんなら、きっとすぐに友達が出来て、日本にいる私とうめこのことなんか、あつという間に忘れてしまうんだろうなと思った。そして、これはネガティブな私の想像じゃなくて、本当に本当のことなんだって、自分の中のしんと冷えたところで思った。

そのまま手をつないで境内の奥に進む。狛犬が両脇にある階段を上がると周囲の空気が急に変わって、温度が下がったように感じた。本堂の近くには誰もいない。さやちゃんは、さつきまで手をぶんぶん振って元気に歩いていたのに、今は神妙な顔をして、歩いている。

お堂の前まで来て、二人で小銭入れから、五円ずつ取り出して、さいせん箱に入れる。こんなときでも、さやちゃんは、小声でシュート！ って言っていた。それから、鈴から伸びている綱を一緒に握った。

さやちゃんが勢いをつけて思いっきり綱を前後に振るものだから私は転びそうになる。さやちゃんは、それを見て笑った。いつの間にか、もうブルーじゃなくなったみたいだ。私も笑った。

パンパンと手を打ち鳴らして、手を合わせて私たちは目を閉じる。

さやちゃんのタスマニアでの生活がうまく行きますように、タスマニアデビルと戦って、ケガとかせませんように。

私のお願ひ事が済んでも、さやちゃんは、まだ祈っている。目を閉じたまま何かぶつぶつ言っているさやちゃんの耳元で、「ゆいのこと忘れないでね」と小さい声で囁いた。さやちゃんは釣られて、「ゆいのこと忘れません」と付け足してくれた。

お参りをすますと約束の時間まで、三十分もなかった。駅までの道を小走りに歩く。急がなきゃという気持ちと、でも急ぎたくない気持ちで、心と体がばらばらになりそうだった。

そのとき、さやちゃんがいきなり、一つの屋台に走っていった。りんご飴の屋台だった。店先には、大きなりんご、姫りんご、いちご、ぶどうなんか棒に刺さって並んでいる。

さやちゃんは、「ゆいは、何が欲しい？」と聞いた。私は、いちご飴を指さした。

さやちゃんは自分のお小遣いで、私にいちご飴を買って、自分には大きなりんご飴を買った。手と口の周りを真っ赤にべたべたにしなから、大きなりんご飴と格闘しているさやちゃんを見ながら、私はピンク色のいちご飴を齧る。いちご飴は、想像していたより甘くて、でもちよつとすっぱくて、おいしい。それなのに喉の奥から何かがこみあげてきて、鼻のあたりがツンとして、涙が出そうになって、私は、わざと美味しい美味しいと大きな声を出して、急いで食べた。

さやちゃんは、半分まで食べ進んだところで、いきなり私の顔の目の前に、舌をべって出した。舌は作り物みたいに真っ赤に染まって、てかてか光っていた。私は、一瞬じっとそれを見つめて、それから、視線をそらせた。さやちゃんは、しつこく見てみてーといいながら、舌を前に突き出して迫ってくるから、私は、「早く食べてよー」と言いながら、笑って逃げる。

でもこれは、絶対に内緒だけど、本当は、その赤に触れてみたいなって思ったんだ。真っ赤でおいしそうなの、さやちゃんのやわらかいところに。

さやちゃんに出会って、私、気付いたよ。何かを願うたびに、私は、私の形になっていくんだってこと。

私たちはまた、手をつなぎながら走る。浴衣が汗で張り付いて気持ち悪い。初めて履いたビーチサンダルのせいで、親指の付け根はきつと帰ったら水ぶくれになってる。でも私たちは止まらずに走る。

私はさやちゃんが持っていたりんご飴の棒をさっと取り上げて、自分のと一緒に通り浴衣にあった大きなゴミ箱に投げ入れた。

シュート！ さやちゃんはピースサインをして、顔全体をくしゃくしゃにして笑ったんだ。